

Title	共通の悲劇的運命：チャールストンで思う
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所, No.34, 2006.2 : 3-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4287
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

共通の悲劇的運命——チャールストンで思う

聖学院大学総合研究所長

大木英夫

ラグレンジ大学のエイハーン教授は、「南部のひとは今なお南北戦争の敗北を理解していない」と言った。この言葉に誘われて、南部昨年十二月にチャールストンを見る機会を得た。限りなく美しい海、悲運の思い出のただよう埠頭、南北戦争勃発の歴史が地理と交叉する町並み、馬車にゆられながらチャールストンの空に「神の残した黒い穴」(ロバート・ペン・ウォレン)を見た。

ウォレンの言葉を知ったのは、聖学院大学で教えられたS教授から頂いた評論集の題名(『神の残した黒い穴・現代アメリカ南部の小説』)からであった。「南部とはひとびとが祈りをするところだ。しかし、それは彼らが神を信じているからではない。彼らが信じているのは、神が去ったとき、空に残していった黒い穴だ」。ケンタッキーの作家トマス・メーブリはこう言ったそうである。「アメリカの北部と南部との距離は、日本と南部とのそれよりもさらに遠い」と。安岡章太郎氏は、このメーブリの言葉がどこまで真実であるかは、この評論集を読めば分かる、と称賛した。

すべてネガティブなものを受け入れることは困難である。正・反・合とは弁証法の論理である。ネガティブなものを媒介として高いレベルに止揚（アウフヘーベン）される。しかし、論理的には純粹な「正」と純粹な「反」と純粹な「合」があるが、歴史の中ではそうではない。「正」（ポジティブ）には「反」（ネガティブ）が混ざり、つまり不純な「正」、不純な「反」があつて、だからそのネガティブの中になお何かポジティブなものが含まれていて、そのポジの部分の部分を固執すれば、決して止揚（アウフヘーベン）は起こらない。チャールストンの埠頭の記念館には、南北戦争における南部の主張を示す文書が掲示されていた*。——南部も「人間の進歩はやがて奴隷制の廃止を結果する」と考えた。「しかしこれは段階的進歩であるべきだ」、南部はそう考えた。アメリカの理想については同一であるとしても、農業国としての南部諸州は、北部が工業化して行くのに比して、発展段階にズレがあつた。だから南部は、理想と現実とのギャップを顧慮しない過激な理想主義は悲劇的破壊を結果すると考えた。南部は敗北を受け入れない、敗北を理解しない。

* "The closely related issues of slavery and state sovereignty were so volatile that they were not directly addressed in the Constitution. At the time of the Constitutional Convention in 1787, the economies of the southern states depended upon slave labor for their agricultural exports. Most delegates professed Enlightenment ideals and believed that the continued progress of man would eventually result in the end of slavery. But this was to be a gradual process. Any direct reference to slavery in the new document might cause a fatal rupture in the negotiations between regions and prevent a federal union."

今日のグローバリゼーションはどこから起こつたのか。それは、南北戦争というアメリカ大陸内部の巨大な爆発が世界史に惹き起こした歴史的津波現象であろうか。南北戦争は、独立戦争、第二次大戦、ベトナム戦争、そして今日のイラク戦争の犠牲者の総和よりもはるかに多い、アメリカ史上最大

の戦死者(六一八、〇〇〇人)を出した。

この発展段階のズレは、今日のグローバリゼーションの動向においても反動を惹き起こす。そのことが、新しい世紀を古い世紀の依然たる継続とする運命にまき込むのではないか。平和とは世界史における終末論的な可能性という言うべきか。

第二次大戦、悲惨は、ヨーロッパではドイツで、そして日本でも経験された。そして、敗戦後六十年にしてなお、ドイツはどうか、しかし日本は、あの「敗北」を理解していない。こうして日本と南部はその悲劇的運命において共通する。だから日本が南部を理解するのはよい。理解することの深まりは、たましいの親近感を惹き起こすであろう。アメリカ史理解にこれまでとは別な感覚を自覚めさせるであろう。アメリカを北部のピューリタニズムやヤンキーイズムからだけ理解すべきではない。『敗北を抱きしめて』という日本論がある。南部は「敗北」を抱きしめることができるか。いや、果たしてアメリカは、南部におけるアメリカの敗北を「抱きしめる」ことができるか。そのことができたならば、アメリカはもつと「世界をデモクラシーのために安全にする」(ウイルソン大統領の言葉)ため必要な智慧を獲得できるのではないか。リンカーンは狙撃されて死んだ。それはアメリカのポジティブだけの理想主義のもつ悲劇性を示している。世界史は、二十世紀の悲劇におけるネガティブなもの止揚する知性を持ち得ていないまま、二十一世紀のはじめに9・11の悲劇を経験した。近代的知性の中に何か深刻な喪失があつて、知性の増大が悲惨の増大を伴っている。知性の中に「アフヘーベン」が起こる可能性がなければ、世界史の動きは聖書の預言する「最後の審判」へと向かつてのたうつが如くに加速して行くばかりではないだろうか。

否定的なものを媒介としてより高い知性の次元に上がる、その可能性は知性が「祈り」を覚えると

きに獲得できるのではないか。いや、正しく言えば、そのような祈りは授与されるのだ。「神が去ったとき、空に残していった黒い穴」、旧約聖書のモーセは「神の後ろ姿」を見た、それは歴史におけるネガティブなものに見る超越の残像であると思う。

アメリカから戻ったとき、S教授からこんな手紙を頂いた。——「前略 失礼いたします。私ごとで恐縮でございます。数十年にわたる迷いを経た結果、昨年末のクリスマス聖日に、私は受洗いたしました。荆妻が教会員にしていたでいる教会です。今は、生後十日ほどになった新生児のような気持しております。今後とも、御導き、御見守りのほどをよろしくお願い申し上げます。不一」。

歴史の悲惨の克服は深く人間の内奥における転回から起動する、それは世界史の中心にキリストが刻んだ教訓であることを思いながら、この老教授の手紙を感動をもつて読んだ。